

京都大学生態学研究センターのミッション・ビジョン・タスク

(令和 2 年度末策定)

人類が地球上の様々な場所で直面している地球環境問題は、21 世紀において解決すべき最大課題であり、その把握と解決のためには包括的な視点で自然や社会にアプローチする必要があります。これらの現状に鑑み、生態学への社会的要請とその役割はますます大きいものとなっています。京都大学生態学研究センターは、さまざまな地球環境問題の解決に資するべく、地球上のあらゆる環境において動物・植物・微生物と多様な生物群を扱い、生態学的研究手法に加えて分子生物学・安定同位体・理論生態といった多様な解析手法を駆使する研究者を擁し、生物多様性および生態系の機能の解明と保全理論の構築を目的として、生態学の基礎研究の推進と生態学関連の国際共同研究を推進してきました。

当センターは、平成 3 年度に「生態学の基礎研究の推進と生態学関連の国際共同研究の推進」を目的とする全国共同利用施設として 10 年時限付きで設置されました。その後、平成 13 年度には、「生物多様性および生態系の機能解明と保全理論」を設立目的として、第二期の 10 年時限の研究センターとして再出発しました。平成 16 年には、日本全国の国立大学が法人化され、時限後の改組・改廃は大学の判断に委ねられることになりました。平成 22 年には、文部科学省による新しい制度「共同利用・共同研究拠点（以下、拠点）」が施行され、当センターは我が国で唯一の生態学・生物多様性科学の拠点として認定を受けました。その後、文部科学省・科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会が全国の国立大学の共同利用・共同研究拠点を対象に実施する拠点の評価において、平成 25 年度の間評価、平成 27 年度の期末評価、平成 30 年度の間評価の全てについて、当センターの拠点は高い評価「A」を獲得し続けています。また、当センターの拠点の評価が高いことに鑑み、平成 28 年 3 月末、当センターに課せられていた 10 年の時限が撤廃され、平成 28 年 4 月以降、当センターは我が国唯一の生態学に特化した恒久的部局として京都大学に設置されています。

当センターは、欧米の生態学・生物多様性科学の大学附置研究所・センターと比較すると小規模ではありますが、質の高い研究成果を継続的に発表している点において国内外で高く評価されています。特に、地球環境全体の保全にとって大変重要なアジア・グリーンベルトにおいて、当センターが生態系・生物多様性の研究でリーダーシップを取りながら国内外の若い研究者と共に研究を進め、生態学・生物多様性科学において国際的に大きなうねりを産み出す諸活動には定評があります。具体的には、当センター独自の組織である西太平洋・アジア生物多様性研究ネットワーク（DIWPA、デューパ）に当センターの各教員が個人的に有する国際ネットワークの研究者を引き込むことに

より、“Mega-biodiversity”と称される西太平洋・アジア諸国の豊かな生態系・生物多様性研究に欧米を始めとする最新の研究情報・技術が融合され、国際的に独創性の高い研究テーマを創造しようとしています。

2020年3月30日、当センターの共同利用・共同研究拠点、研究、教育、財政、DIWPA・国際連携、総合地球環境学研究所との連携などについて、5名の審査員による外部評価を行いました。その結果、当センターが平成3年に掲げた目的が、すでに現代の社会情勢に合致しておらず、当センターとして新たなミッションを構築する必要が指摘されました。我々はこの指摘を受けて、令和2年度に半年以上の時間をかけてセンター内で議論を行い、今般、以下に掲げるミッション・ビジョン・タスクを策定いたしました。また、これらは令和3年3月11日に開催の当センター運営委員会（学内委員10名、学外委員11名）において了承されました。当センターは今後、以下に掲げるミッション・ビジョン・タスクを指針として、生態学・生物多様性科学の学術基盤強化と発展、研究水準の向上、独創的な研究テーマの創出、研究者コミュニティの活性化に取り組み、これらを通じて当該学問分野の素養を深く学び、国際的かつ学際的な視点から生物と環境の関係を包括的に捉えることのできる人材を育成し輩出して行きます。さらに、当センターは人類と地球生態系の持続可能な関係性を探索する一助となるべく、生態学の普及と社会実装に務めて参ります。種々の貴重なご意見を賜った外部評価委員の皆様、および当センターの活動をさまざまな形でご協力くださってきた皆様に厚く御礼申し上げますと共に、今後も当センターの活動に引き続きのご支援を賜りますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

京都大学生態学研究センター長
中野伸一

● 2020年3月30日の外部評価委員（五十音順）

東北大学大学院生命科学研究科・教授 占部城太郎

横浜国立大学大学院環境情報学研究院・教授 鏡味麻衣子

北海道大学北方生物圏フィールド科学センター・教授 齊藤隆

京都大学大学院理学研究科・教授 沼田英治

京都大学大学院農学研究科・教授 松浦健二

☆ ミッション（京都大学生態学研究センターの意義）：

生物多様性・生態系の統合的研究および次世代の育成を通じて、人と自然の持続的関係の構築に貢献する

☆ ビジョン（京都大学生態学研究センターのあるべき姿）

生態系における生物間および生物と環境間の相互作用を解明するため、『野外調査』・『実験』・『理論』の統合的アプローチで研究を行う。西太平洋およびアジア地域における生態学のハブ機関として、基礎的な生態学・生物多様性研究および分野横断的研究のネットワークにおける触媒および牽引役としての国際的役割を果たす。これらを通じて、生態学の素養を深く学びかつ学際的な視点から生物と環境の関係性を包括的に捉えることのできる人材を育成する。また、人類と地球生態系の持続可能な関係性を探索する一助となるべく、生態学の普及と社会実装に務める。

☆ タスク（京都大学生態学研究センターの具体的役割）

- * 生態学の研究機関として、先進的・独創的研究を行う
- * 共同利用・共同研究拠点として、国内外の生態学研究に貢献する
- * 京都大学大学院理学研究科の協力講座として、生態学的視座を持つ次世代を育成する
- * 西太平洋アジア生物多様性研究ネットワーク（DIWPA）の活動などを通じ、生態学の国際的ハブ機関として貢献する
- * 総合地球環境学研究所との連携プロジェクトなどを通じて、社会と生態系の持続的な関係について学際的研究を推進する
- * シンポジウムや公開講座などを通じ、生態学の社会的認知の向上、生態学的知見の発信に努める